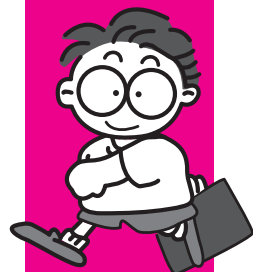


第12回

論説文(2)

意味段落への分割
人をつながること

慣用句



次の文章を読んで、後の問題を考えましょう。

- ① 「人は見かけだけではわからない」、「外見で人を判断するな」とよく聞くが、これはどういうことを言っているのだろうか。もちろん、その人の人格・人からはよく話し合わないとわからない、ということだ。しかし、あらためて考えると、これらの言葉には続きがあるように思える。
- ② 国会議員がTシャツにジーンズで国会答弁しているという姿はまず見ない。もし、そんな姿を見たら、君はいい気持ちがあるだろうか。いや、しないはずだ。Tシャツとジーンズという身なり自体が悪いわけではない。議員も自宅にいるときは、そんな身なりで過ごすこともあるだろう。
- ③ 海水浴でにぎわう夏の浜辺にただ一人、背広にネクタイ姿でいたら、居心地が悪いに決まっている。まわりの人たちから白い目で見られるかもしれない。これは場違いというものだ。
- ④ 見かけて悪く見られるのは損だ。「外見で人を判断するな」というのは、人はそれだけ外見で他人を判断しがちだということを示している。ならば、「外見で人を判断するな」とは「外見で人に悪く判断されるな」とも言えるのではないか。
- ⑤ 要するに、状況に応じた身だしなみを整えなさいということだ。特に、見ず知らずの人たちが行き交ったり集まったりする

15

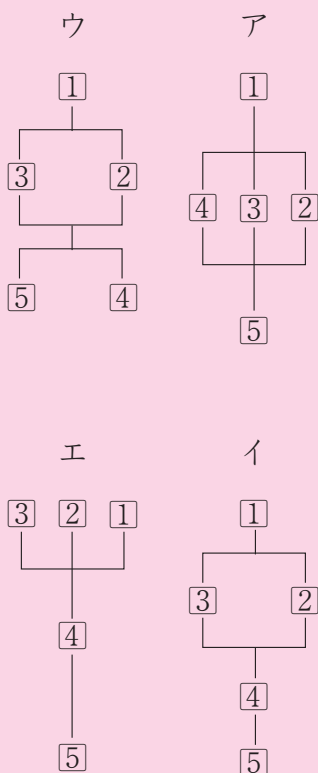
10

5

「公」の場所では気をつけるべきだろう。スムーズな社会生活を送るために大切なのは、自分の立場をわきまえて、そのときの状況にふさわしい服装を心がけることだ。

基本例題

この文章の段落関係を図で表したものとして、最もふさわしいものを次から選びなさい。



◎ 段落関係と文章の型

段落関係を表した図を選ぶ問題は、こうした問題を解くときにも、第6回で学習した段落関係の読み取り方が基本です。

《段落関係の読み取り方》

- (1) 形式段落ごとの話題と要点を読み取る。

20

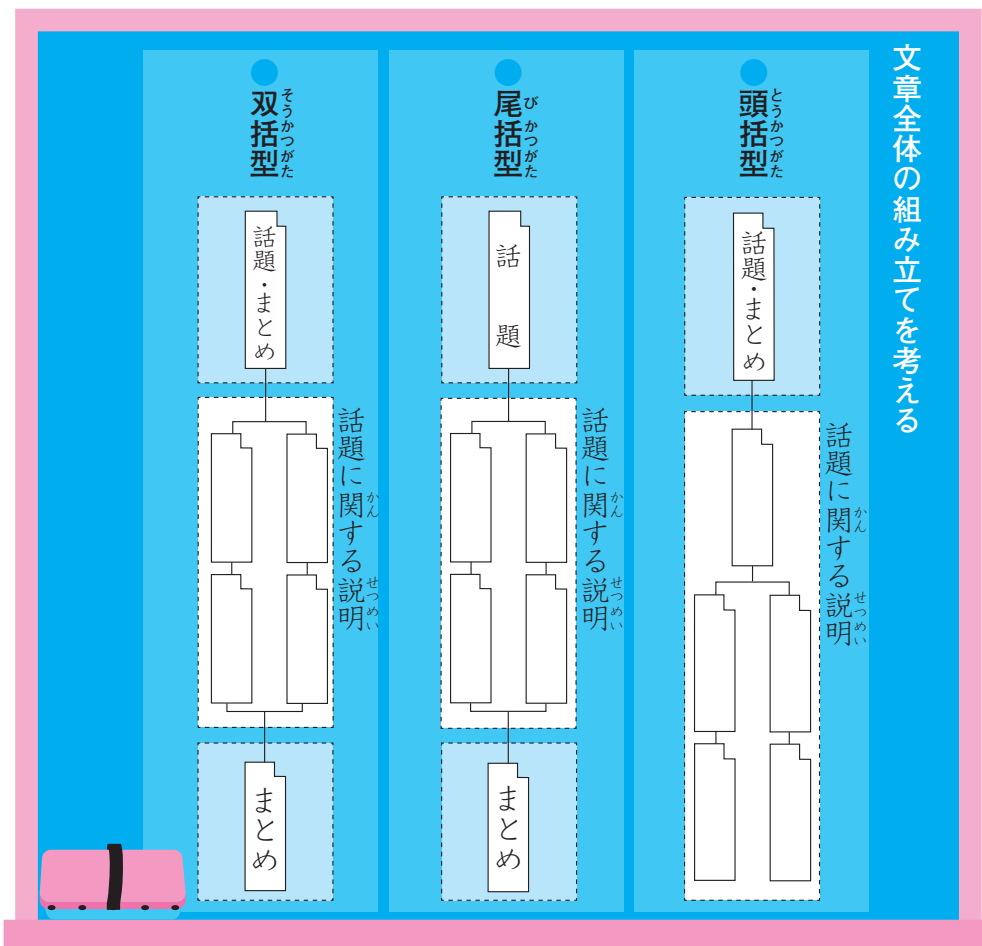
と今まで述べてきたことをまとめる言い方で受け、問いかけに答える
 ①段落での問いかけ(話題提示)に対して、⑤段落で、「要するに」

5	4	3	2	1
そのときの状況にふさわしい身だしなみを心がけることが大切である。 (↓文章全体のまとめ)	「外見で人を判断するな」とは「外見で人に悪く判断されるな」とも言える。 (↓筆者の考えの展開)	海水浴でにぎわう浜辺に 場違いである。 (↓具体例②)	「人は」だけがTシャツにジーンズ姿で国会答弁するのは場違いである。 (↓具体例①)	「人は」だけでわからない。「で人を判断するな」とよく聞か、これはどういうことを言っているのだろうか。 (↓問いかけ)
(結論)	まとめ	説明		話題

- に言葉をあてはめ各形式段落の内容を整理してみよう。
- (2) くりかえされる〈重要語句〉を点検する。
 - (3) 文章途中の〈問いかけ〉Ⅱ 〈新しい話題〉Ⅱ 転換
 - (4) 段落のはじめの接続語の働きに注目する。
 - (5) 段落のはじめの指示語の働きに注目する。
- ↓ (1)~(5)の読み方を組み合わせ、各形式段落の話題・内容が共通しているのか、連続しているのかを考え、意味段落に分けます。

形で、文章全体をまとめていきます。
 ②段落と③段落は、順序を入れかえても内容のつながりがおかしくならない、並立の関係になっています。こうした並立の関係を段落関係図で示すときは、「横並び」で表します。

論説文のような説明的な文章を大きく意味段落に分けると、わかりやすい(論理的な)文章ならば、次のような「文章の組み立ての基本パターン」のどれかに分類できます。



基本問題



◆ 次の文章をしつかり音読してから、後の問いに答えなさい。

こわいものに出会ったとき、君はどうするだろう。 ①、もしお
ばけが出たら、君はどうするか。

あんまりこわかったら腰をぬかすだろう。昔から、おどろいて腰を
ぬかした話はよく聞く。腰をぬかすというのは、^①こわさというより
は、むしろおどろいたためなのだ。不意をうたれて、こころが混乱し、
5

なにもこころがからだに命じることができないでいる状態なのだ。ふ
つう、昼間だったら、ぼんやりしていて、注意をしていないときに、
不意をくらったらおどろく。だれかが、かくれているなどということが
わかっていけば、そこからワツとび出されても、びつくりすること
はない。夜は、どんなに神経を集中していても、充分に注意しきれな
いから、つまらない小さなことにもおどろかされる。
10

おどろきは、あるものが、あまりに不意に現れたので、危険かどう
か区別がつかなくて、なにをしたらよいかわからない当惑の感情であ
る。

こわさと、おどろきとの間には、こんなちがいがあある。そのことを
おぼえていてもよいだろう。

②、こわいものに不意に出会って、おどろきを感じ、そのおど
ろきがしずまってきたとき、君はどんなことを感じるだろうか。正直

にいたまえ。

君は、まずその場から逃げだしたい気持ちを感じる。それが逃走の
衝動と呼ばれているものだ。うしろをふりむかずに、全速力で逃げた
い。なにもかも、ほっぽりだして逃げたい。そう感じたからといって
も、じつさいに逃げることはならないのだが、そういう衝動はだれ
でも感じる。

こどものころ、ぼくも夜、お使用に行けといわれ、どうしても、暗
い人通りのない道を通らなければならないことが、いくどもあった。
そんなとき、ぼくは、よく空気をだして「おばけなんか出るはずな
いさ。出たら、のしてやるさ。かみついてやるさ。おばけなんてこわ
くないぞ」と自分に言いきかせて、家を出たものだ。だが、お寺とお
20

宮の森にはさまれた道に近づくと、^②ぼくの元気はだんだんしぼんで
きた。ぼくは唱歌はへたでふだんはきらいだったが、元気をつけるた
めに、こんなときでできるだけの声をはりあげて歌ったものだった。ぼ
くが、歌を歌ったのは、こんなときと、便所の中ぐらいのものだ。し
かし、声がふるえると、みつともないのでやめた。そして、いつのま
にか、気がつく自分の歩きかたが、ふだんの倍も速くなっているこ
35
とを感じた。足のほうは、もうかけだしたくて、うずうずしていたし、
心臓もドキドキしていた。なにか、ガサリとか、サアーツとか音がし
たら、とびあがりたいたいような気持ちだ。自分の全神経が外側に向けら
れていて、警戒態勢にはいつていることが感じられた。そのころには、
もう、おばけと取っ組みあいをしてやるうなどという気持ちはなくな
り、なにかあったら逃げだしたい気持ちでいっぱいだった。
40

こう書くと、ずいぶんとぼくがおくびようだったように思われるかもしれない。だが、じつさいには向こうみずで、ケンカでは負けたことがないほど強かったほうだ。それでも、はっきりと自分の中に逃げだしたいという衝動が起こってくるのを感じた。

この逃げたいという衝動の強さは、 の度に比例しているといってもいいだろう。逃げだしたい衝動を起こすものが、こわいという感情だといってもよいくらいに、この感情と衝動は強く結びついているのである。

逃げるのは、とてもひきょうなことのよう に思われやすい。3、逃げるというのは、自然の中で生きている動物にとつて、自分の安全を守るために、もつともたいせつな、もつとも有効な手段なのだ。とかく強くなり、たたかって勝って、自分の安全を守るのが、いちばん確実なように思われがちだが、③じつさいには、それがいちばんむずかしい。強くなることで安心感を持ちたいという気持ちは、だれのころにもある。それは願望というものだ。しかし、考えてみればすぐにもわかることだが、強くなって安心するためには、この地上で最高に強くならねばならない。どんな動物でも、生まれたときは赤んぼうだし、赤んぼうのときから、最高に強い動物なんて、考えられないだろう。自分より強い動物がいるかぎり、いつも逃げずにたたかう本能 しかなかったら、何回かのうちには、自分がかならず殺される番にまわるはずだ。これでは、自分の安全を守ることにならない。

その反対に、攻撃のための武器、牙だとか、角だとかがなくとも、ただ逃げるための速い足を持って いるだけで、この地上での生存競争

で、生きぬき、生き残っている動物が、どれだけいるかわからない。④そのことは、この地上の動物を見まわしてみればすぐわかる。弱肉強食の原則のきびしい自然で、弱い、ただ逃げるだけしかとりえのない動物が、たくさん生き残っていて、強い、りっぱな牙や角を持った動物が、死にたえそうになっている。

そうした自然を見ても、君たちは、逃げる ことが、動物にとつて最大の武器であること、そして、⑤もつとも知恵のある防衛法であることがわかるだろう。古くからあることわざ に「三十六計、逃げるにしかず」。君も知っているにちがいない。あのことわざは、じつに奥深い真理をあらわしている。おくびようで、ただ逃げあしの速い、うさぎの長い耳と大きなあと足は、世界でいちばん弱い動物を生きのこらせることに成功させた、最大の武器なのだ。⑥どうだ、君たちも

これから、恥ずか しがらずに堂々と逃げるようにしたらどうだろう。自然の中では、動物のひとつにすぎない人間のころの中で、逃げる たいという衝動が強く残 っているても、不思議ではない。4、人間は、道具も武器ももたない状態では、けっして他の動物とくらべて強 くはないのだから。 (なだいなだ「心の底をのぞいたら」より)

問一 1 4 にあてはまる接続語を次から選び、それぞれ記

- ア しかし
- イ たとえば
- ウ しかも
- エ ところで

問二 線①「こわさくおどろいたため」とありますが、

1 「おどろき」とは、どのような気持ちですか。次の□にあてはまる言葉を指定された字数で抜き出して答えなさい。

・ A 二字に現れたものが、B 六字の区別がつかないために生まれる C 二字の気持ち。

2 「こわさ」が感じられるときの説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 心が混乱しているときに感じられるもの。
- イ どんなに心が平静であるときでも感じられるもの。
- ウ いろいろと思い悩んでいるときに感じられるもの。
- エ おどろきがしずまったときに感じられるもの。

問三 線②「ぼくの元気はだんだんしぼんできた」時に、反対に

ふくらんできたものは何ですか。文章中から九字で抜き出して答えなさい。

問四 □にあてはまる言葉を本文中から三字で抜き出して答

えなさい。

問五 線③「じつさいくむずかしい」とありますが、

1 「それ」は何を指しますか。「くこと」につながるように、文章中から二十五字以内で抜き出して答えなさい。

2 なぜ「それ」は「むずかしい」のですか。「くから」につながるように、文章中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問六 線④「そのことは、この地上の動物を見まわしてみればす

ぐわかる」とありますが、どういうことがわかるのですか。文章中の言葉を使って四十五字以内で答えなさい。

問七 線⑤「もっとも知恵のある防衛法」とありますが、

1 何が、「知恵のある防衛法」なのですか。文章中から五字で抜き出して答えなさい。

2 その「知恵」は、何のためにあるのですか。次の□にあてはまる言葉を指定された字数で抜き出して答えなさい。

A 七字のきびしい動物世界での B 四字で、生きぬいていくため。

問八 線⑥「どうだ、君たちもどうだろう」とありますが、逃

げることが取ずかしいことと思われるのはなぜですか。その理由が述べられている一文を探し、はじめの五字を抜き出して答えなさい。

問九 線「あのことわざは、じつに奥深い真理をあらわしてい

る」とありますが、どのような真理を表していますか。「奥深い」と筆者が述べている意図がわかるように、文章中の言葉を使って六十五字以内で答えなさい。

というのは、問題があってもそれにこだわらない、という意味を表します。

まあ、そうかな。

というように、判断をする場合にも使われますが、「ほかにもいろいろ問題があるだろうが、問題をとりあえずは無視して」という意味です。従って、この言葉は、まずは問題をスキップして次に行きましょう、という、相手をなだめる言葉になるわけです。

もつとも、使い方に注意が必要なものもあります。

③ 煮えたぎった油に水を注ぐとかえって水がはねて爆発するように、相手が火のように怒っている場合に、当事者が「まあ、まあ」などと言わないほうがいいこともあります。激しい怒りに直面した場合、いたずらに消火の言葉を使ったりしないで、しばらく「まずは話を聞く」というようにして、相手の怒りのエネルギーが放出されるのを待つことも選択肢の一つです。また、あまりにも危険な状況であったり、怒りが収まりそうにならない場合は、その場から脱出するということも選択肢の一つです。

⑤ このあたりの対応は慎重にしてください。
最後に、もう一つ。争いになった場合、
Ⅲ ⑥ ようにすることが必要です。これには二つの注意が必要でしょう。

まず、相手が怒ってきた時に、必ずしも自分が全面的に罪悪感を感じたりする必要はありません。相手が怒りをぶつけてきたとき、誰しもしは驚いてしまうもの。ついつい、自分を責めたりしがちです。⑦ 相手が怒ることの全責任が自分にあるように思う必要はないのです。もちろん、反省してみることはいいことですが、相手

45

の感情は究極的には相手の問題です。相手が怒ったら、「ああ、この人は感情的になっているな」と思うような冷静な気持ちも持っているといいかもかもしれません。逆に、相手を怒らせないように、と自分が極端な自己規制をかけてしまうことで、結果的に相手に不本意なコントロールを受けてしまうこともあるので、こうした思い切りは大切です。

もう一つ、自分も感情的になっている場合に当てはまるのですが、いつまでも感情の問題に目を奪われないようにしましょう。過去は変えることはできないもの。お互いに何を求めているのか、ということにも注意をし、未来について考えるのです。何が感情的なしこりのもとになっているのか、それを取り除くにはどうすればいいのかを、お互いに明らかにしていく努力が必要です。お互いの要求は何なのかを明らかにすることもいいことでしょう。争いに限ったことではありませんが、自分がどうしてもほしいのか、という具体的な要求を明確に出すと、感情的な「こじれ」から抜け出すことができます。いわば、感情的な「争い」を「交渉」に変えると言っていいかもしれません。

⑧ (森山卓郎「コミュニケーションの日本語」より)

問一 文章中の I Ⅲ Ⅳ にあてはまる言葉として適切

- ア 後悔しない
- イ まずは反省する
- ウ 冷静でいる
- エ 自分を見失わない
- オ 怒りの感情を消す

70

75

80

問二 文章中に二カ所ある《 》(4・23行め)のどちらにも

あてはまる言葉として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア さらさら
- イ ぜんぜん
- ウ なかなか
- エ どんどん

問三 文章中に二カ所ある のどちらにもあてはまる言葉

として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア お母さんは私がフランスの学校で学んでいることを忘れたの？
- イ お母さんはどうして私の部屋を片づけてくれないの？
- ウ お母さんはどうして私に部屋を片づけさせたいの？
- エ お母さんはなぜもつと冷静に話ができないの？

問四 — 線①「この状況」とはどのような状況ですか。最も適切な

ものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 気持ちを落ちつけたことで、互いの意見に耳を傾けることができそうな状況。
- イ 大きな声を出す相手におびえてしまい、つい弱気になってしまいうような状況。
- ウ 一方的に言いたいことをぶつけてくる母親を嫌いになってしまいうような状況。
- エ 感情的になってきている相手を前にして自分も頭に血が上ってしまいうような状況。

問五 — 線②「この話」とありますが、

1 「この話」の具体的な内容が書かれている部分を文章中から探し、はじめと終わりの八字をぬき出して答えなさい。

2 「この話」を例に挙げながら筆者はどのようなことに注意しなければならぬと述べていますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 怒りにまかせて話せば、相手は反発したり心を閉ざしたりしてしまうこと。
- イ 時には頭ごなしにどなりつけることで、相手を黙らせることも必要だということ。
- ウ 怒る気持ちをためないように気をつければ、感情の爆発は避けられること。
- エ いつも怒ってはかりいると、相手は自分の話をまったく聞かなくなること。

問六 — 線③「煮えたぎった爆発するように」とはどういうことをたとえていますか。六十字以内で答えなさい。

問七 — 線④「いたずらに」とはどのような様子を表していますか。

最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 軽い気持ちで人を困らせたり、ふざけたりする様子。
- イ よく考えもせず、むやみやたらと行う様子。
- ウ あわてふためいて、判断を誤っている様子。
- エ はじめから決めていたことを最後まで押し通す様子。

問八 —— 線⑤ 「このあたりの対応」の例として適切でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 責める イ 待つ ウ 逃げる エ なだめる

問九 —— 線⑥ 「二つの注意」とはどのようなことですか。文章中の言葉を使って五十字以内で答えなさい。

問十 —— 線⑦ 「相手が怒ることの全責任が自分にあるように思う必要はない」のはなぜですか。適切なものを次から二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 相手を怒らせないよう自分の気持ちを抑えることで、相手の言いなりになってしまいう可能性があるから。

イ 相手の怒りの原因が自分にあると素直に認めてしまうと、自分の気持ちをコントロールできなくなるから。

ウ 相手が怒っているのは単に性格の問題であり、自分が悪いと反省すべき理由などどこにもないから。

エ 相手が怒っているのはあくまで相手の心の問題であって、自分の気持ちや考えとは何ら関係ないから。

オ 相手を怒らせたなら、まずは何がいけなかったのか、自分の言動を冷静に振り返らなければならぬから。

問十一 —— 線⑧ 「感情的な『争い』を『交渉』に変える」ためにはどうすることが必要ですか。次の文の□にあてはまる言

葉を指定された字数で文章中からぬき出して答えなさい。

① 7字 の原因を取り除き、互いに ② 6字 を出し合うこと。

問十二 この文章はどのようなことについて述べられていますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 意見がぶつかった相手にどうすれば勝つことができるのか。

イ 自分と異なる意見に耳を傾けなければならぬのはなぜか。

ウ 自分の考えが通用しないとなぜ感情的になってしまうのか。

エ 意見や感情の対立を乗り越えるためにはどうすればよいか。

応用 友だちと意見が合わずに険悪な雰囲気になったとき、あなたは どうしますか。考えをまとめなさい。

慣用句

●二つ以上の言葉が結びついて、それぞれのもとの意味とは異なる特別な意味を表している言葉を「慣用句」といいます。

例 ① 転んだときに、口を切った。

② 学級会でいつも口を切るのは四谷君だ。

① 実際に口を切って怪我をしたことを表しています。

② 「最初に発言をする」という意味で使われています。

②の場合のように、「口」「切る」という二つの言葉のそれぞれのもとの意味をはなれ、特別な意味を表すようになった言葉を「慣用句」といいます。

慣用句には、体の一部を表す言葉を使ったものや、日常生活に關係の深い道具や品物を使ったもの、また、身近な動・植物を使ったものなどいろいろあります。

照 (↓) シリーズ4年下 第2～4回・漢字とことば5上157～161ページ参

《覚えておきたい基本的な慣用句》

鼻

鼻を明かす (周りの人を出しぬいて、あつと言わせる。)

鼻にかける (自分で自分のことを自慢する。得意がる。)

鼻が高い (自分に関して得意げにしているようす。)

鼻に付く (あきあきしていやになる。)
 鼻であしらう (他人の頼みを冷淡な態度であつかう。)
 鼻を折る (恥をかかせる。自慢する気持ちをくじく。)

足

足が出る (予定以上の出費で赤字になる。)

足をひっぱる (他人の前進や成功のじやまをする。)

足を洗う (よくない仕事をきっぱりやめる。)

足が棒になる (つかれてしまつて足がこわばる。)

足が付く (逃げた者の行方・足取りがわかる。)

足元を見る (相手の弱点を見すかす。)

足が地に着かない (落ち着きがなくそわそわしている。)

足をのばす (遠くまででかけていく。)

足が速い (売れ行きがよい。食物などが腐りやすい。)

足を運ぶ (頼みごとなどのために、わざわざ訪ねていく。)

あげ足を取る (人の言葉じりをとつてからかう。)

二の足を踏む (しりごみをする。行動をためらう。)

手

手を焼く (手だてがなくて困る。もてあます。)

手を打つ (話し合いの決着をつける。仲直りする。)

手に余る (自分の力では解決できない。)

手を切る (あまり好ましくない人間関係をやめる。)

手が届く (細かいところにまで注意がいきわたっている。)

手を引く (それまでしていたことをやめる。)

手を抜く（するべきことを省略し、いいかげんにやる。）
手に負えない（自分の力ではあつかうことができない。）
手をこまねく（何もしないで、ただ見ている。）
手がかかる（時間や労力が必要で、やっかいだ。）
手がつけられない（どうすることもできない。）
手も足も出ない（自分の能力ではどうにもできない。）
手に汗を握る（緊張や興奮でてのひらに汗をかくほどはらはらする。）
手を広げる（あることをしながら、さらに新しいことを始める。）
手に乗る（相手の計略にひっかかる。）

目

目に余る（あまりのひどさにだまっていられない。）
目をかける（特にかわいがってめんどうをみる。）
目がない（我を忘れるほど好きである。見分ける力がない。）
目から鱗が落ちる（あることをきっかけに、それまでわからなかったことがわかるようになる。）
目から鼻に抜ける（りこうで、判断や理解がはやい。）
目に付く（目立って見える。目立って、人の注意をひく。）
目の色を変える（欲しくてなりふりかまわず行動する。）
目をひく（その方向に目を向けさせる。注意を向けさせる。）
目を丸くする（おどろいて目を大きく見ひらく。）
目の中に入れても痛くない（かわいくてたまらない。）
目は口ほどにものを言う（感情のこもった目は、言葉よりも強く相手にうったえられる。）
目を見張る（おどろいて、目を大きく見ひらく。）
目を皿にする（何かを見つけようと目を大きく見ひらく。）
目を白黒させる（目をまわすほどおどろく。）

目を奪う（あることに注意をひきつけ、見とれさせる。）
目もくれない（無視して、見ようもしない。）
目が肥える（ものの価値を見分け、評価する能力がある。）
目が利く（もののいい、悪いを見分ける力がある。）
目を疑う（意外なことに出会い、自分の目が信じられない。）
目も当てられない（あまりにひどく、まともに見られない。）
目が高い（すぐれたものを見分けるだけの力がある。）
目が回る（非常にいそがしいようす。）
目と鼻の間（二つの物の間の距離が非常に近い。）
目の敵（なにかにつけて目ざわりで、にくらしく、やっつけてやる）
目に角を立てる（おこってするどい目つきをする。）

口

口を割る（かくしていたことをしかたなしに話す。）
口を切る（多くの人のなかで最初に発言する。）
口をそろえる（複数の人が同時に同じことを言う。）
口がすべる（言っただけではないことをうっかり言ってしまう。）
口が重い（口数が少なく、あまりしゃべらない。）
口が軽い（なんでもかるがるしくしゃべる。）
口を挟む（自分の関係のない話にわりこむ。）
口をとがらす（不満な気持ちがあることを顔に出す。）
口をぬぐう（悪いことをしてもそしらぬ顔をする。）
口車に乗る（口先だけのうまい言葉にだまされる。）
口をすっぱくする（忠告・注意を何度も繰り返す。）

問一

次の1～15の□にあてはまる言葉を後の語群から記号で選び、()内の意味を表す慣用語を完成させなさい。
目標時間 4分

- 1 □を明かす(周りの人を出しぬいて、あつと言わせる。)
- 2 □が出る(予定以上の出費で赤字になる。)
- 3 □を巻く(すばらしいことにひどく感心する。)
- 4 □が立たない(相手が強くてとてもかなわない。)
- 5 □を割る(かくさないで心の中をすっかり打ち明ける。)
- 6 □を割る(かくしていたことをしかたなしに話す。白状する。)
- 7 □を長くする(実現を今か今かと期待しながら待つ。)
- 8 □から火が出る(恥ずかしくて真っ赤になる。)
- 9 □を持つ(味方になって援助する。)
- 10 □が痛む(あまりにつらくて苦しい。)
- 11 □を折る(途中でじやまをし、物事の流れを途切れさせず。)
- 12 □を冷やす(危険や恐れを感じて、ぞっとする。)
- 13 □をまじえる(少人数で集まり、親しく話し合う。)
- 14 □をかじる(独立して生活できず、親に養ってもらう。)
- 15 □に縊りかける(力や技術を示そうと張り切る。)

- | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ア | 足 | イ | 顔 | ウ | 歯 | エ | 口 | オ | 腰 |
| カ | 膝 | キ | 舌 | ク | 脛 | ケ | 肩 | コ | 腕 |
| サ | 首 | シ | 胸 | ス | 鼻 | セ | 肝 | ソ | 腹 |

問二

次の1～5の各組の□には、すべて同じ言葉が入ります。それぞれ漢字で答えなさい。
目標時間 3分

- | | | | | |
|---|-------|-------|-------|---------|
| 1 | □にかける | □が高い | □につく | □であしらう |
| 2 | □に余る | □をかける | □につく | □の色を変える |
| 3 | □が痛い | □を貸す | □を傾ける | □にたこがでる |
| 4 | □を打つ | □に余る | □を切る | □をこまねく |
| 5 | □が広い | □が売れる | □をつぶす | □に泥を塗る |

問三

次の1～12の□にあてはまる言葉を答え、()内の意味をもつ慣用語を完成させなさい。
目標時間 4分

- 1 □を呑む(驚きや緊張などで、一瞬、呼吸を止める。)
- 2 □に乗る(思いどおりになっていい気になる。)
- 3 □を投げる(見込みがなく、あきらめて手を引く。)
- 4 □に流す(以前の争いごとをなかつたことにして咎めない。)
- 5 □木に□を接ぐ(筋道を通らないことのとえ。)
- 6 □をくくる(たいしたことはないときと軽く見る。)
- 7 □を上げる(弱音をはいて、降参する。)
- 8 □が知らせる(何となく前もって心に感じる。予感がする。)
- 9 □を打つ(相手の話や意見に調子を合わせる。)
- 10 □を売る(用事の途中でむだ話などして時間をつぶす。)
- 11 □につく(仕事や役柄などが、その人に似合ってくる。)
- 12 □が置けない(親しい。遠慮する必要がない。)